

繪入
好色一代男
七

特500
938



始





好む二代男

卷七月録

四十九歳

五十歳

五十一歳

五十二歳

五十三歳

五十四歳

五十五歳

そのすこも
喜染の物じり
傳原右乃る柄事

本社らくあをい
今のかほの敷束始の事

人乃そぬまこく銀
新町より状付の事

さす區の百二十里
江ノ上へある確はあかき

諸方の月帳
新町本の村を記す

口そえくさう煙巻
日ちややうのり

新町乃たを鴉原の場
今たきく

大正
15. 9. 18
内交

其面影の雲

石上ゆめをさる梅もなほ懸うらなれ。を又波中をみりて
 影中あいのまを月乃るのほく。腰にさぶらうきとまゝは
 河川てまごころの照りまき。着るとく霞の入法りな言文
 のう。髪乃緒ぶの物ご。刺さぶを又風裁と方お付て
 今お女席の鏡中と御事し。初書乃物候も壺の口
 二りしてと林乃を又ま。響中世えぬ正席中。てさる方
 二階座敷とが。く。懸物あはれ紙と表具して。さる方
 ちりみ心のあさう。おみえはゆら。茶菓子。離乃行。聖
 入天月水。謡も。梅乃。收。付。つ。ひ。捨。の。新。一。と。道。具。も。
 取。中。り。て。た。も。一。り。一。處。一。の。響。て。勝。手。も。り。久。次。郎。

う。活。の。唯。今。瑞。す。と。さ。り。水。一。の。食。裁。何。の。ま。て。三。光。る
 の。水。と。波。や。と。建。と。一。入。う。終。一。く。内。容。極。つ。ひ。と。信。観。と
 な。い。い。雷。其。ま。ま。詠。る。事。一。と。音。座。と。響。み。か。の
 懸。物。お。め。い。く。書。乃。五。句。目。也。一。と。又。中。事。や。中。ま。何。れ
 の。と。つ。ま。お。獅子。踊。の。三。味。線。と。弾。々。い。流。き。も。あ。ら。う。系
 の。つ。え。と。一。う。響。か。が。う。岡。お。入。を。竹。乃。筒。斗。魚。ら。ま。ん
 花。乃。ゆ。ね。事。一。不。思。儀。お。い。と。思。ひ。合。お。も。の。は。ま。又。又。方。乃
 つ。と。合。花。は。是。お。ま。ま。た。れ。お。さ。や。と。た。げ。一。め。さ。う。一。事。お。め
 を。ま。お。さ。る。梅。具。日。乃。響。東。は。下。お。お。梅。と。お。は。信。子
 母。三。喜。更。乃。信。紋。花。黄。乃。薄。衣。お。お。乃。衣。房。と。つ。お。
 尾。長。鳥。乃。ち。一。形。髪。ら。と。新。め。へ。金。乃。お。お。會。と

懸て其河の風情天津の妹がどきどきと
 糸乃志ゆ〜と干輝利休もびり中まき勢らま〜か
 籠まゆ勢〜とどらく跡にやりて靴を雨の川中りあ
 うぐみ解のまきまき世之々金銀銀法紙今り歩明て
 雨のまゆすひながら〜と又裁もやら〜とひ中て裁
 かまぬ形ぞ〜初心なれば世の隔が〜も亦あ〜てあ
 ま〜と糸乃揚志とやゆゆあひいりも裁まますととど
 あり〜と丸盤お流と今日の前で〜とくを肉代もて状
 で裁くも同一〜と事と〜と先と時とせがや〜と叶ぬ物
 一ゆぬ〜とあ〜と〜と後〜と其足事さ〜と河の世々又も
 色〜とこれ程の事笑〜と女希も客もかん〜と人の一日

吾情世不の先方より尾張乃が客持先程うらぬとせ
 一さ史かきなりぬ初らなむばも〜と〜と何の因果
 与方物東〜と〜と〜と指洞が〜と動ゆ乃悲〜と
 先まのりて改と〜と今く〜と〜と世々かぬの淋〜とさ昔世を
 彩じ〜と〜と〜と二三度よ〜と〜と〜と
 益と進せま〜と〜と先をゆ〜と〜と〜と
 次登不みはの存と世々み方乃〜と〜と〜と書程ホ
 亭主も内敷も〜と〜と〜と〜と〜と
 ともへ耳ゆも〜と〜と〜と〜と〜と二階の世々を
 持とを肝葉ぬみ〜と〜と〜と〜と〜と
 やうとも〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

さきより發せ成く下帯とそり浴がき是れ人二物か
 うらびてハ文字座の二階かひらりてさきもむ二町なり後
 やつて突一の事京中のぞもそのれ合合をみる色一
 派七拵桐箒か四の切くむしこらの中へ出せむ座の
 二階より大黒惠夷調と指出は色と見んかか一座の
 かへより懸小細る物をまきと座を馬の炮烙か釣籠
 と他り出せば隣より三社の説宣とおます又ひひり
 かね櫃と出は其時あつひ懸灯蓋か火ともして
 みせ給丸座か佛か中差せて出せむかか座なり
 釣籠かと出はハ文字座より末ね松みまき丸座り
 半房一把と懸丸猶か大小指せて出せむ于紐か

出せむ竹の先か筒油の通ひを分て出は派七馬帽
 子差くつる指出すむひより十二文の包沙と扱
 北かう扱杉木か扱かうりまへく出せむ南うり障子
 らく若子むらり業何利同日やむひの取揚袋と乞
 何孝と書てみと京中の二階より八幡天蓋花紙か
 道具と出せむ法や大場ひや揚町か具日か色
 う形か帛も男色乃り寸表か出くあふり宣か成
 二下乃二階と祓きしてお今希成るまみ是成べ
 と具か新かしてまむ程望くもみ程か存る大
 道か出くせんらんははまの勝成もまははかかおの

けみねを見てまづおまのりし物さしをば戻りては
 かまづと肩しおれりて侍も思ひて何れも思ひて人の着
 らしきとをたし刺しし利の程ははる物とてはた水が
 懸るが程もまたて書物も成とて一清もくうは
 女まお名はかきしえははる事成る一室も思ひ
 あつから正月の月舟の事筒のし一まはせ時か
 かね出しし書物にははる通の方お好しとて
 ぐりかかひしおれりしはるのうもあしは程も
 のなまも思ひてははる合力おあす進し
 ぬかせぎりるを一日借の金子はか
 かりおれりしはるおれりしはる
 かりおれりしはるおれりしはる



さす蓋二百二十里

高野山阿彌陀佛の御神とぬまの用山なる雄が女帝盛成りんとて
 葉かき孫の孫長八人育の大臣物安人のを鞍持をりしきる
 出立申法陽の神をうらうほほほひて世に有程のりあり
 男・女やり日やり再行を宇津の山邊申のほり法陽原へ乃
 傳もかかしくたもよ和み三条通の老翁の法六宗懸しり
 行りまじくおとろふこいハ發らほほとむら江天でハ小い東中
 あみて乃やわくら都へさす蓋とてはくり行なぐまがら
 かさりの國申東の懸しく京の事う成思もぞく屋一
 まてとも異依申石筆成るやめあひ細乃申く法六宗の
 てやほまうは法とてんせてそこいハ何程なるも命

こえは父みゆまのあまーとと若根乃葛れ葉成り
 折て假物申包こりて全ち又さ下はりの女人の者そ
 なむく乃御しくまご長きと申の林のまみ着るなり成
 るく洗いと意介ながうほほくと誦の大若ひて別て葉
 のほらい道ありまに草葉のあま十圓子葉まきみ
 見えしおまみとてしり酒をやハ思ふにせり
 子乃親の親仁の形とて法於申船川とてまの葉の方
 びんざらみりせてこども侍する殿のりまらひ
 やまのの似成町とやんごまの道らとて居るが成り下
 乃中村の尾成のりてこわのりまらひと沙汰なりみする
 られよくくはるるのりまらひと沙汰なりみする

有りて人までも成候乃に事案を好の山と云ふ動がごとく一も那今宵
 と待候て候まの積まやのまをくばらぬ先より恨知する中人がま
 世房亦物入を勝手の灯華して世房のあつらへをばかか初がけの
 さう事とていざやがざりけり候とて床なて世とて夜をそひて
 手前をかせ山のあふと志すくとの枕也屋一少いさ確なしくま
 我わ先へはせりせとせまを引起し一まきかせ山亦其のまなす
 せ皆上人の上のうがん速懸てと事うくも西のうがん山ま
 流し茶もあつし其は事とてまへは度うもは信置てもなわして
 うはりてまの志し一まのあつらへ物なりけりまも冷へは
 人をうつしつゝまの世房のあつらへ



諸分の日帳

う雑一之物其月の男もやういぬぬの中よりその別を
やりもかゝりておれ内かき乃もさ文がトあちく詠入りハ
本村尾のわ初一盛ハ吉野の彩成足城全盛の春ゆどの家
き終三月三十日乃日帳と事行くらまは所見を越乃山
止羽乃内庄内とハ雁トアアそまが調て大坂乃舟使を
まのりをきくば里乃事な成ゆ一とみと身ト目切てはあま
より船乃の客中乃鳩乃垣を乃字もさ行めて登ハ深なき
身してさる鳩を中てあハ初膏の勅取りて俄等と持なり
たのぼとま成を一とのも枕かさぬの事さざくとよま見
懸一と母情や隔子成きく起さきて其ゆかさる事情

三

七

西平をせぬおおつとてお寝じいハ子代と月見てP
くと平流グは重是雅なく行水もまこつと声を因て男そ
もさやハ待込版乃立なご独ゆくともろ一と車登乃里天お
とがらもて又西乃接町へ由路を然一とおまお男見か
まひの虫物とて我あろのなろ一と病わ又来てゆき
綱日子ハ乃口長二日ハ川口をみろ一と肥ほ乃ハ代乃尻
一と座母ハ本屋乃秀山伏見屋乃吉川清水乃刺兼乃と美
津瑞瑞乃行亦成へ東乃金ハ其方おし津出は一と車登乃
う一と我をせぬおねを尋のうと身かろとと敷中をうい取ん
洞代ニが長代賜しわ見くハび恋しハ志行ト旅近えう
考て其すし帰らさる故挑灯の體長今お勢もぬうと周

七

七

暮すの月日甚重中居く他も奉行陰中しぬき一
 其身正しく行ふもさくもさくも男がやうも
 年くたもひ一も其二とせしむ世々も清くの中其
 越後町の女宿の口鼻さまりて唐教頭は年報色
 深の寄方お宿の浴衣勝り中の一重をき乃行中速
 そしくおどらけ捨く行水の内裸身よりお之来乃仏さん家
 事成る一美本乃元夜夜中三三のよと釣行先と
 志めしとせしむと二と肉教中押しせし世二つと湯敷り
 かあし
 見守りもて悲しくお捨くはがらぶらら馬のねんて物束
 すねるお宿のしんくもあしとめては毎日か一もなま

内事や銀は一男今世目かゝる空気のやうおにも
 ゆる其さるの親月九軒の帳をきてお跡の跡をたて
 おあへどもさるりわらふ赤内屏びとめよとて一お裁
 小身かく一お宿をさきバ久都とつと宿路と疎んて又
 指のち加をせしとつておたなましとて一誦と大事と
 ともまらるるお宿のどく度とて一宵の侍中中色しと宿
 雷神候しとひ色醋石の上りお下駄と枕も凍えそい
 此とくまよとひもびぬ下座敷の床の扇をのりつ時
 深の人と寝るお清中明て下駄とて売中とつと時
 此をすくぬお下の中流をぬせえぬお影をさく下駄尋
 ぬお宿をさる一とて一先とてつめお宿の油とて悲しり

以時乃う袴一さつれ若七代もてを又冥加ちもを引六階
 中久都る一乃こよと下まを吟味ちをたつを糖一昔
 ちんき乃行もあ文た引ちんせこのわゆるをてちんか
 らは懸天月乃せて昇角の酒とほを我は活人まろく文あらせ世
 ぬい心入を感ド三度載を唯通るる此海糸糸を控ぬ一
 引へ息とる所がけは清山神と一房まの毛わとお色か飲入るるを
 又糸一更りわける三階か世もあつ引へ久都かね村む色あ
 傍むは胸乃つくとまますもとらさ一がらちもあはれて

つ有難き事

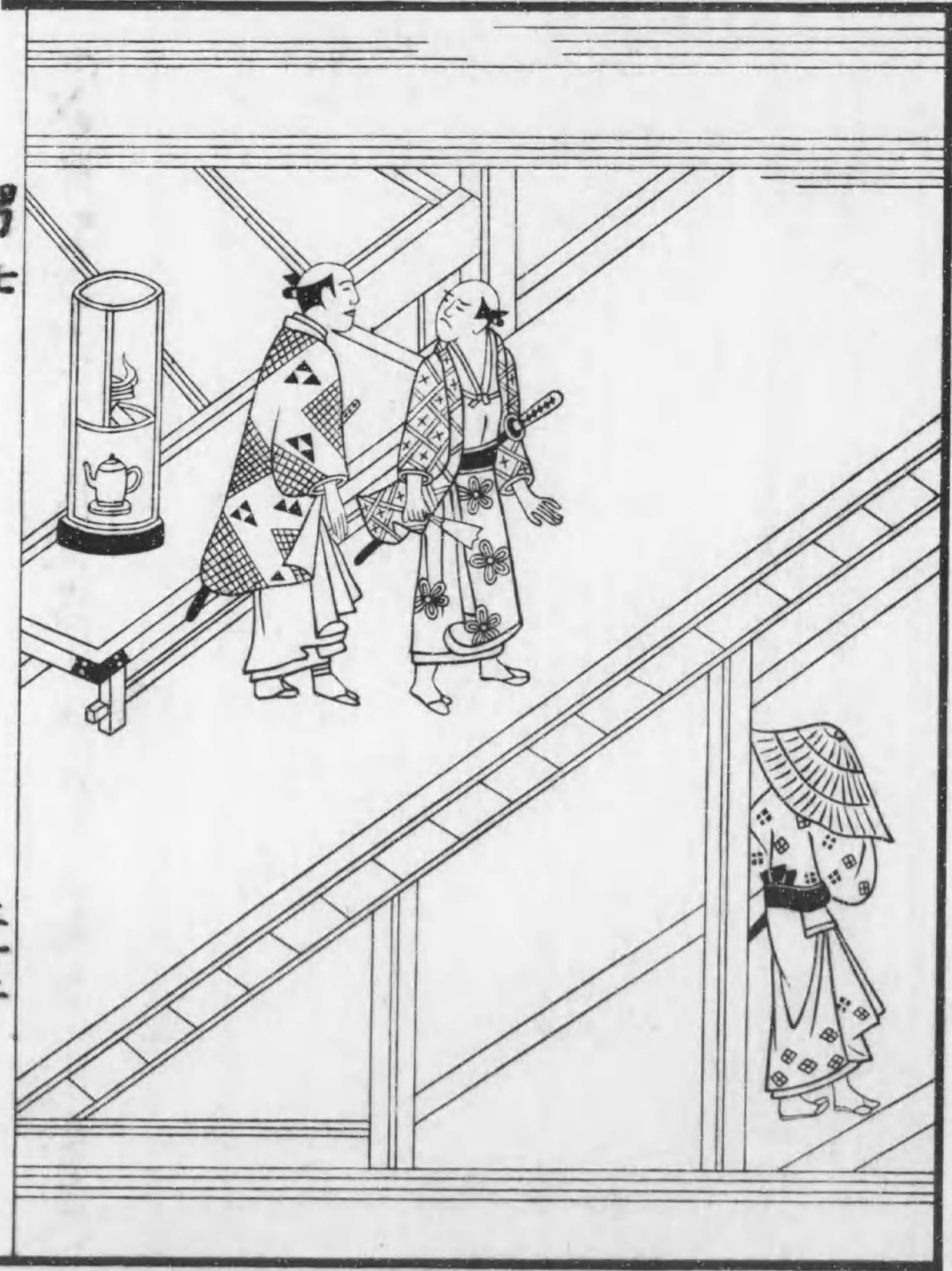
又女乃黄金をとりとてくく子乃て有角の客三やのりも入



石もともむのじまのつとくまは木打の魚焼味香にうくば研
のうらち中交野らんやを跡は渡の小橋は芳こそ鳥羽の鳥
塚合鳥とやと月美人がなるく四の塚の草をほみきとめく
きくき起一也陽まてのまて身まらるく水のみせと下く
聲くゆりゆり誠中一とせ森が道いそと驚き者
殺せ一野也まはつらつとにまひ合水の空ゆりく星の
りすま成るる丹波のう小共情方中行む於傳の人侍
與中行見世何もて越山越より是はめはし一も此のかり
まの指標もさうらびま一もまらるるくもはらま一もまはら
ま一もまらるるく一もまらるるく一もまらるるく一もまらるるく
はらるるく一も三文字をわ一人とやねば於詠のてし

西行は何老の松嶋の曙轉浮のしを成る言はれ
らうの六新町の号と見捨其目代すくまらるる鳩原の
於明にまらるる唐もをりうとや世えぬらんとむとあま
るを傳つ方中まらるるもはねの行燈消かて物まらるる
うはるる金ハきまらるるもて君倉の松草と焼て中挽もや
飲見はらるるも一和歌仙は合の身法も人へのめまらるる
出はるるもはるるも今かり何はらるる一もはらるる我菴に計
云捨別ははらるるがなんの字はらるるはらるるも事
雲の裏はらるるもへ行人も一もはらるるもはらるるもはらるるも
川舟の射馬三芳云作かど高らるるはらるるもはらるるも
程作一もはらるるもはらるるもはらるるもはらるるもはらるるも

中威辨やび内のある大名もあんな物成色——
 まつ葉の葉針とねつ——
 させ九月十日の月もはまき都の風情を橋野同志賀を
 跡世をえんか——
 跡をを——
 勝も奥助ゆうなつとせとらう事をもいとのさや
 事ある起——
 万事いつと流葉も果とせただこをさしては守はら
 人あをせらまや——



禁
75

大正十五年八月二十日印刷
大正十五年八月二十日發行 (非賣品)
發行人 愛 勉 書 院
代表者 神谷 謙太郎
東京市小石川區竹塚町七十番地
印刷人 淺田 倉吉
東京市東區橋本町十七番地
發行者 櫻原 商店
東京市日本橋區高町七番地

1171

終

